

---

空

そばこ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

空

### 【コード】

N1996C

### 【作者名】

そばこ

### 【あらすじ】

どんより曇った空の下。放課後の教室に残る双子の兄弟は会話する。しかし、弟の話はどこか奇抜で、兄には理解しがたく、またウザくて仕方ない。それでも、彼は静かに弟の話に耳を傾ける。

「なあ。太陽がないよ」

誰もいない放課後の教室で、窓から空を眺める赤い頭はそう言った。

「そうだな」

青い頭の俺は簡潔に相槌を打つ。

「なんで」

赤いのは訊くので、

「曇ってるからだろ」

とまた簡潔に答えてやった。

すると、赤いのは

「たいよあ〜っ!」

と空に向かって叫んだ。

ああ、バカな奴。

空

赤い頭は俺の双子の弟で名を盟メイという。

二卵性のため、さほど似てはいないものの、身長とか体重とか、数値的なものは互いに近く、また、醸し出す雰囲気なんかも似ているらしい。

友人曰く、

『フェロモン垂れ流し』

だそうだ。

そんな俺たち双子だが、やっぱり似て非なる者同士。

髪型は、俺の方が短いし、色も互いに変えている。目の形は、俺がつり目、盟はたれ目。筋肉は、俺が目立たないのに対し盟はガツチリとはつきり分かる。

なのに、頭の中は盟の方が幼稚。もう高1だって言うのに、さっきみたいな事を言う。

兄ちゃんは、恥ずかしいぞ。

「さっきから何なんだ」

呆れたように言うと、盟は俺を振り返った。その目は恨めしげで……涙ぐんでいるように見えるのは、俺の気のせいであってほしい。

「太陽ないと、寂しいじゃんか。空、暗いし、オレ、沈んじゃう」

「勝手に沈め」

空

「いやあーっ！周シユウがオレをいじめるーっ！！」

「……………」

これが、俺と大差ない遺伝子構造をしているのかと思うと、溜め息が出る。

てか、溜め息しか出ない。

だいたい、自分の頭が赤いつて時点で、お前は充分明るいと思うのは俺だけか？

ああ、でも。沈んでる時のお前ほど、うっとうしい奴もいないな。

だったら…

俺も、太陽が出てほしいよ。

「で、ホントにさっきから何なんだ。ウザいな」

「ウザいなんて言わないで」

盟はさらに瞳を潤ませた。

ああ、やっぱり涙目なのは俺の気のせいではないんだな。

てか、その図体でその仕草は、ある意味犯罪だと思っぞ。お前は可愛いつもりでいるかもしれんがな。

空

「で、だから何なんだ」

もう一度訊ねる。

双子だから以心伝心で伝わるもんだと思っ  
ているなら、大間違いだ。

双子であっても、それぞれ別人格だし、  
性格も違えば考え方や思考のタイプも違  
う。

端的に言えば、俺が理論的であるなら、  
盟は感性的だ、と言っ事だ。

そんな奴を、「芸術家気質」と言えば聞  
こえは良いが、とどのつまりは、ただの  
「バカ」。

天才とナントカは紙一重と言うが、俺  
の見解では、盟は確実にナントカの方  
に属すと思う。

いや、属す。断言して、属している。

「空が暗くても、周はヘーキ？」

「意味が分からん」

本当に、意味が分からない。

空が暗くて平気か？って、何が。平  
気じゃ悪いみたいな言い方が、何か  
ダメな事があるのか。て言うか、ど  
うしてお前は平気じゃないんだ。

空

「青くない空でいいの？」

「いやだから、意味不明だっつて」

「周は青いの？」

「は？」

「青いの？」

「……」

ああ。どうしよう。コイツ、本当にバカだ。

俺が青いって、もしかしてこの髪の毛の色をさしているのか？

いや、もしかしなくても、そうだよな。そうなんだよな。

お前は、俺のこの色が、空色で、俺は青い空が好きなんだと、勝手にそう思っているんだよな。

どうだ。凶星だろう？

ああ、凶星なんて言葉、お前には難しくて分からないか。

何だか、兄ちゃんは、どっと疲れたよ。

「あんな、盟。これは別に空の色じゃ……」

「オレがどんなに元気でも、周がそっぽ向いてたらヤじゃん」

空

「……」

俺の言葉の途中で、盟がまた、意味不明な事を言う。

俺は本気で理解できない。

何だ？ どういう意味だ？ 空の話はどうなった？ てか、お前は話を飛ばしすぎだ。

理解しようと努力する事さえ、叶いそうもないぞ、コラ。

「盟。意味が分からんって……」

「どんなに明るくつてもさ、壁があっちゃダメなんだよ」

どうやら、盟は俺の話に耳を貸すつもりはないらしい。こうなると、自分が納得するまでとことん語っちゃう奴だから……仕方ない。最後まで聞いてやるか。

「雲の上って、きつと明るいよ。でも、今日はそれが分かんない。どんなに俺が明るくてもさ、周が沈んでちゃ、おもしろくないじゃん。だって周は空だもん。曇ってちゃ、ヤダ」

そう言っつて、盟は再び窓から空を見上げる。

「周が沈んでたら、オレも沈んじゃう。きつと太陽も元気ない。だからオレ、沈んじゃう」

空

ああ。なんとなく、お前の言わんとしている事、分かるような気

がするよ。

本当に、意味不明な“盟的理論”じゃあるけどな。

そんな意味不明な事が分かる辺り、やっぱり兄弟なんだろうな。

いやだなあ。

「周。太陽が輝けるのは空が青いからだよ。あの抜けるように気持ち良い青色が好きだから、輝けるんだ」

そして今度は俺を見る。

もう、目は潤んじやいない。

「だから周。元気出して」

真っすぐに俺を見る盟の瞳は、やんなるぐらいに澄んでいて。

どうやら今日は、奴に屈しなければならぬようだ。

「……元気だよ」

少しの沈黙の後、ゆっくりと、だがはっきりと言った。

元気だ。充分、俺は元気だよ。お前に心配されるなんて、これっぽっちも思っっちゃいなかったけど。

でも、サンキュ。

空

「周……」

盟がまた、何か言おうと口を開いた時。

「あれっ。お前ら、まだ残ってたんか？」

クラスメートで仲の良い友人の一人、ピンクのツンツン頭をした男が教室に入ってきた。

「楓」

男の名は荒谷楓。アラヤカエデ目がくりくりしていて、やたら可愛らしい顔をした、正真正銘の男だ。

「あれ。周たち、まだいたんだ」

「いたよ」

楓の後ろからもう一人、黒髪の男が顔を出す。

これもクラスメートで仲の良い友人の一人。アイバザクロ相場石榴、通称ザク。

ザクの言葉に盟が返事をする。

「先帰ってりゃいいのに」

そして最後に頭を出したこの男は、長髪で金髪の日和美月。ヒロミツキこれも、正真正銘の男で……

空

盟が、俺の事を心配した原因。

「えー。一緒に帰ろうよ、仲良しじゃん」

たれ目をさらに垂れさせるぐらいにへらへらと笑って盟が言う。

盟は、俺たちの中で潤滑油の役割も担ってると思う。

太陽、ではない。たとえ俺には太陽だとしても、俺たちだと、そうじゃない。

ああー。何だかんだで、やっぱり天才とナントカは紙一重つてのはホントだな。

バカ、なのにな。

そう思ったらちょっと愉快的気分になって、一人でやけてしまった。

「周、何か良い事でもあったか」

にやけた俺に気付いた日和が冷めた調子で俺に言った。

瞬間、せつかくの潤滑油が乾いてしまった。が、気にしない。

だって俺は、盟のバカに元気づけられたから。

「別に」

空

一言。言って、もう一度口を歪めてから、日和を真っすぐに見据えた。

「日和の髪が綺麗だなと思って」

ニヤツと笑う。

こういう笑い方をする時は、俺らしさを取り戻した証拠。だから、盟は嬉しそうに笑ってる。

楓もザクも、ホツとしてる。

「帰ろうぜ」

日和だけを見て言う。

俺と盟より長身で、もう少し線の細い日和は、端正な顔立ちのために冷たく見える。

でも、美人は嫌いじゃない。金髪もやったら似合ってるし、だからむしろ好きだ。

だからこそ、俺たちの衝突はしょっちゅうで……

日和は俺のその呼び掛けに苦笑して答えた。

「言われなくても」

この一言で、今日の喧嘩はチャラ。

空

俺は、この喧嘩で沈んでいるつもりはなかったのだけど、盟にはそう見えていたようだ。

いや、実際に沈んでいたんだろう。そういう気配り……いや、勘は鋭い奴なんだ。

空の話は、理解が難しい所が多々あるが、そんな事はどうでもいい。気を遣ってくれた事が、ただ、嬉しい。

盟は、空が青いから太陽は輝けるのだと言っただけで、俺は違う。

太陽が輝くから、空は青でいられるんだ。

心地好い気持ちでいられるんだ。

澄み渡る青空。

確かにそれが一番だよな、盟。

(後書き)

読んでくださり、ありがとうございました。よかったら、感想・批評を下さい。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1996c/>

---

空

2009年3月24日09時35分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。